

## クイディタース quidditas について

—トマスの場合—

水田英実

I. 抽象名詞 quidditas は疑問詞 quid からつくられた語である。<sup>(1)</sup>そしてものの本質を表わすために用いられる。トマス哲学には周知のように本質を意味する語がいくつもある。<sup>(2)</sup>この quidditas はそのうちの一つである。

さて最も普通に「本質」と訳されるのは *essentia* である。訳語の適否は別にしてこの *essentia* という語は、『有と本質』第一章の説明によれば、「存在するもの」*ens* が「存在」*esse* を有することに由来する。しかも興味深いことに、同書では *essentia* はただ実在的に存在するものだけに妥当する語であるとみなされている。それは、いわゆる命題の真理を表示する用法において「ある」と肯定される事柄は必ずしも *essentia* によって捉えられているとは限らないのに対し、十の範疇に分かれて存在するものすなわち「何か」として実在するものは、どの範疇に属するにせよ、みな何らかの本質を持って存在すると言われるからである。<sup>(3)</sup>それでは、存在を持ちかつ本質を持って実在的に存在するものにおいて、存在と本質はいかなる関係にあるのであろうか。<sup>(4)</sup>

『有と本質』第一章によれば、「哲学者たち」はこの問題を問う局面において *essentia* を *quidditas* と言い換える。つまり *essentia* の同義語としての *quidditas* を用いることによって、同じものを表わすのに「ある」*esse* こととの関連よりはむしろものが何らかの規定を受けて「ある」*esse quid* ことに着眼するのである。<sup>(5)</sup>それはこの世界の中に存在する様々の事物はみな何らかの限定・制約を受けて「何かとして」存在しているとみなされるからである。<sup>(6)</sup>そこでここに存在と本質の合成を見出しうるならば、ものの「何」*quid* を規定する本質を「何性」*quidditas* と呼んでよいわけである。ちなみに『有と本質』の同じ箇所、*quidditas* とは定義によって表示される本質であるとも言われる。しかしこれも「ものが何であるか」とい

うことを示す定義によって表示される本質にはかならないから、やはり「何」を規定する本質として「何性」quidditas の名で呼んでよいわけである。

ところで事物の本質的概念ないし定義を得ることができるのは、「ものが何であるか」ということを認識しえたときである。この概念の特徴は外延が特定されることではない。その本質は内包の規定の仕方にある。<sup>(7)</sup>たとえば「羽毛のない二足動物」という概念によっても「理性的動物」という概念によっても「人間」を他から区別して捉えることができる。両者は外延の等しい概念なのである。むしろ内包は相違する。しかし本質的概念ないし定義とみなされるのは後者である。それはわれわれは「人間性」humanitas という抽象の本質を認識することができたときに「人間の本質」essentia hominis を認識する、つまりわれわれはそのとき初めて人間を「人間として」認識し、それを固有の種類のうちに位置づけるからである。しかるに人間性は動物性と理性性から構成される。故に人間は理性的動物であるとみることは人間の本質に適っている。

ここでそれではわれわれはかかる本質的概念をいかなる認識論的手続を経て獲得しうるかという問題が生じる。しかしこの議論に入るのもさることながら、その前にまず既に述べたように、ここでは quidditas を essentia の同義語とみなしていることに注意しなければならない。つまり essentia が実在するものみに妥当するように、ここでは quidditas もまた実在するものみに妥当するのである。そこで、『有と本質』第四章のよく知られた一節において、人間やフェニックスについてそれらが実在するしないの判断とは無関係に「人間とは何であるか」「フェニックスとは何であるか」ということを認識することができるという事実が記されていることを思い出すにしても、上記の前提を破棄しないかぎり、人間の「本質」を認識しうるようにフェニックスの「本質」を認識しうるとは簡単に主張できないはずである。仮に主張するにしてもフェニックスは実在しないと知って撤回しなければならないであろう。もっとも実在するものみに本質があるという前提を崩すならば話は別である。あるいは、実在するしないの別にかかわらず人間についてもフェニックスについてもそれらが「何であるか」ということが同じように知られるためには、どうしてもそれらいずれについてもその「何性」が認識されていなければならない、と敢えて主張するなら、それは知性や感覚作用のうちに存在する概念の「何

性」を指すのであろう。

II. しかしながらトマスにおいてこの語は、最勝義にはやはり魂の外に実在するものの本質を指すのである。さもなければ次のような「困難」が生じるとは言われなかったであろう。「われわれは信仰にもとづいて人生究極の目的は神を見ることであるという。同じように哲学者たちは人間の究極的幸福は質料から存在的に分離した実体を知性認識することであるとみなした。そこでこの問題（人間知性は神を本質的に見るという目的に到達するか）をめぐって哲学者たち (philosophi) にも神学者たち (theologi) にも同じ困難が存し、諸説紛紛たる様を呈することになった。」（『命題集Ⅳ注解』d. 49, q. 2, a. 1c=『神学大全』補遺 q. 92, a. 1c）

この困難は言うまでもなくわれわれの知性と神的本質や分離実体との間に存する隔たりに由来する。むしろ知性認識の固有対象は「事物の何性」quidditas rei なのであるから、もの本質を認識する能力のない知性はそもそも知性と呼ばれない。<sup>(9)</sup>このことに異存はないにしても、人間知性の場合には特に質料的な事物から抽象作用によって「何性」を認識すると言われる。ここには人間の知性認識の仕方に特有の諸問題が存する。しかしながら差し当り人間知性もまた「質料的な事物の何性」を固有対象としてやはり「何性」を認識するものとしよう。ところがそれをみとめるにしても、否かえってそれをみとめるが故に、神的本質や分離実体という本質的に非質料的であるものに対し、われわれはそれらを認識する手立てを全く持たないと言わなければならないではないか。

この意見は一見適当であるように思われる。しかし実は、神や分離実体を認識ないし直観することによって至福がもたらされるといういわば通常でない事柄が、それにしても不当に見過ごされているのではないか。というのも「神学者」や「哲学者」が神あるいは分離実体の本質的認識の可能性を追求するのは、神あるいは分離実体が人間を在らしめる根源であるという理由にもとづいている。そして求める至福はかかる根源を本質的に認識することによってそれと結合し一体化するところのみ成立つと考えているのである。故にもし自分を真に在らしめる根源が神あるいは分離実体のほかにあり、それとの一致によって至福を得るといふ説に満足できないならば、まず、かかる根源が存在し、いかに困難であろうとも、それとの一致に<sup>(10)</sup>

よって知的本性の究極的完成として上述の至福に達することが不可能ではないということを証明しなければならない。次いで第二に、実際にかかるといふ根源の本質的認識が成立しうるかということを示さなければならない。

可知性の観点からこの問題にかかわるとき、しばしばこの第二の点に大きな関心が寄せられる。『命題集注解』の上記の箇所では三つの説を提出し吟味している。トマスが支持するのはそのうちの第三の説である。この説によれば、神あるいは分離実体それ自身が「それによって認識されるもの」quo intelligitur となることによってそれ自身がわれわれの知性に「認識されるもの」quod intelligitur となる。この仕方でも知性は「それによって事物が認識される、あるいは見られる何らかの形相」aliqua forma qua res cognoscatur aut videatur によって知性認識の完全性に達するのである。しかしその「形相」にあたるのは通常の仕方では得られるはずのないものである。この点で他の二つの説は不充分である。何故なら（一）われわれの知性が質料的な事物から抽象した quidditas から更に抽象して得た quidditas を用いる方法は不充分である。それはそのような quidditas による認識は決して直ちに神や分離実体の認識に結びつかないからである。（二）抽象によってではなく分離実体が知性に自らを直接的に刻印することによって知性のうちに形成される概念を用いる方法も不適當である。それは分離実体の quidditas とわれわれの知性のうちに存する概念の quidditas との間にある大きな不類似性のためである。故にこれも「神を見るために充分でないと思われる。」

しかしそれにしても何故トマスは、以上述べた三つの説のうち最初にあげた第三の説だけを支持し、他を否定するの点について一層詳しく調べる必要があると思う。というのも周知のようにドゥッス・スコトゥスの用語として quidditas は「通性原理」と訳され、<sup>(11)</sup>「個性原理」haecceitas と対立させられる。この意味にとるならば上の第一や第二の説を斥けることができるであろうか。何故なら第一や第二の仕方でも、共通性の面からみられた本質を捉えていると言うことができると思われるからである。しかしながらトマスはそういう仕方では求める神の本質直観には達しないと断ずる。知性認識の究極における神や分離実体の本質的認識は、上述の第三の仕方のようにして一挙に与えられるものであって、共通的認識から徐々に現実に即した本質認識へ進むとは考えない。その理由は何か。それを明らかにする

ことが今後の課題である。

なお、質料的事物の本質的認識もまた、果してわれわれの知性のうちに存する何らかの概念の *quidditas* との種的性格における共通性によってのみ為されうと言わなければならないのであろうか。これはいわば「通性原理」による認識であろう。しかしトマスにとって事物の *quidditas* は実在するものの *quidditas* としてそれ自体もっと現実に近いところで捉えられた可知性ではないか。ここにも今後詳論したいと思うもう一つの問題を残す。

### 註

- (1) 疑問詞 *qualis, e* (どのような) から抽象名詞 *qualitas* (性質) がつくられることの類推で, *quid* (何) から *quidditas* (何性) がつくられる。「何性」という訳語をあてるのは、英独語で *whatness, Washeit* とも記されるのにならう。
- (2) *essentia* の同義語として他に *natura* や *forma* がある。 *De ente*, c 1 をみよ。
- (3) つまり「実体」にも「偶有」にも本質がある。
- (4) cf. 山田晶「存在と本質——トマスにおける実在的区別の意味について——」『理想』484号(1973) pp. 25-41。これによれば、トマスが存在者における存在と本質の区別を論ずるとき、「存在者は存在者として単独に考察」されているのでなく、「在らしめる神との存在的関係の場の中で考察されていることを見落」すことができないと結論される。それは「被造的存在者における存在と本質の区別が実在的であるとされる根拠は、実は、神と被造的存在者との間に存する区別の実在性にある」からである。
- (5) *De ente*, c 1 に従えば、アリストテレスは *quidditas* を *quod quid erat esse* (*τὸ τί ἦν εἶναι*) と表現する。これは、*id est hoc per quod aliquid habet esse quid* である。
- (6) cf. 前掲, 山田論文 pp. 39, 40.
- (7) 本質的概念 *conceptus quidditativus* は外延・内包ともに限定された概念である。スコラではこれを *clarus et distinctus* と称する。cf. J. Gretdt, *Elementa philosophiae aristotelico-thomisticae*, I, p. 15.
- (8) *De ente*, c. 4, n. 26 (Marietti): *possum enim intelligere quid est homo vel phoenix, et tamen ignorare an esse habeat in rerum natura.* cf. J. Owens, "Quiddity and Real Distinction in St Thomas Aquinas" *Mediaeval Studies*, 27 (1965) pp. 1-22.
- (9) *Sum. Theol.* I, q. 17, a. 3; q. 18, a. 2; q. 85, a. 5, a. 6 など。

(10) cf. *In IV Sent.* d. 49, q. 2, a. 1 c; si in perfectissima operatione homo non perveniat ad videndam essentiam divinam, sed aliquid aliud, oportebit dicere quod aliquid aliud sit beatificans ipsum hominem quam Deus. Et cum ultima perfectio cuiuslibet sit in coniunctione ad suum principium, sequitur ut aliquid aliud sit principium effectivum hominis quam Deus. Quod est absurdum secundum nos. Et similiter est absurdum apud philosophos qui ponunt animas nostras a substantiis separatis emanare ut in fine eas possimus intelligere.

(11) 『哲学辞典』(平凡社) p. 362 および p. 954 をみよ。